

# 京鹿子

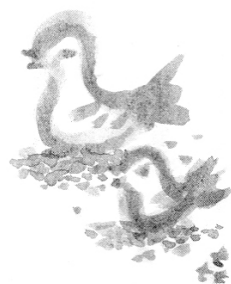
京鹿子  
第11号  
11月号

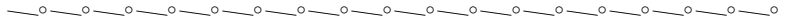
11月号

豊 田 都 峰

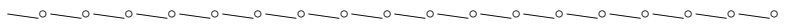
灌 響 集 その三十九

あ か あ か と 穂 高 稜 線 に あ る 晩 夏  
朝 涼 や 塔 影 の 朱 の に じ み な し  
水 か げ の 重 な る こ と の な き 朝 涼  
石 仏 の ひ だ 朝 涼 の ひ と な が れ  
ひ ぐ ら し の 鳴 き の こ し た る ご と き 祠  
か な か な や 出 会 ひ は あ れ こ れ か げ い ろ に





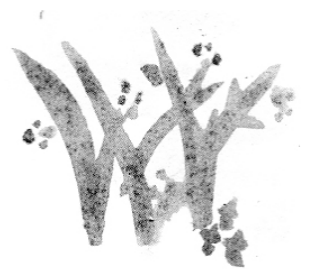
穂草立つ野末を告げる雲なき日  
葦の穂の舳先の分けて岬明神  
秋分へ一候のころ鳥たちの  
鹿垣に里よりの燈とどきゐる  
けいとうの辻より里のみちすがた  
鳥こごろのこと霜降のころなれば  
霜降や草かげあたりさやぎそむ  
霜降や雲にもさやぎきくころか



— 近 詠 —

# ふとん干す

丸山佳子



木の葉髪眉月ほどのことを苦に  
寝ね足りし頭からつぽふとん干す  
妻さびてビロードコート輝かす  
小夜しぐれ鼠の意地におこさるゝ  
わが肩を打ちし落葉をなつかしむ

## 秀華採集

団扇風しみじみと見る坐りだこ

木戸渥子

「団扇風」から連想される姿は、少し体をくずして横座りしているそれ。この作品もその連想でよいが、見つめているのが「坐りだこ」という点が俳諧的である。

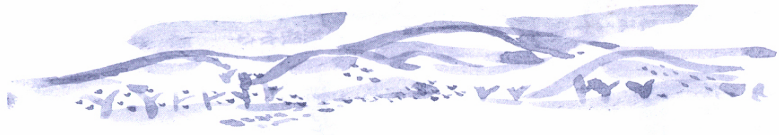
祭り面かむりてよりの孤独かな

田 淵 昌 子

一色は空より借りて虹立ちぬ

村 上 千 紫

前句、祭りの主役的な人物の、对人的分析は的確である。「面」というものの存在をも指摘する。後句の虹、空という背景との関わりの中で把えているのがよい。



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

萩の露

肩くまの児の眼つぶらに萩の露  
鶏頭花まつ赤な嘘は風が消す  
かにかくや嘶のつまの秋扇  
藪じらみ一本道にも道しるべ  
冬がまへ女将と呼ばれてよりの日日



— 近 詠 —

## 広島忌

和田 照海

骨壺に被曝の石や広島忌  
麦飯の饅える記憶や敗戦日  
ケロイドの花嫁その後知らぬ蝉  
ヒロシマの夕焼けは今も焦げいろに  
征きし兄未だ還らぬ八月忌

神麓集



土用丑 北村 香朗  
土用丑團扇で値段出して来る  
うなぎの値すつくと上げて他人顔  
浜名湖線うなぎの値段弁当箱  
江戸切子・薩摩切子にひと口を  
糸底は九谷がよしとはい一杯

梶の鞠 藤岡 紫水

三筆にあやかると硯洗ひけり  
熱き茶の香り一きわ今朝の秋  
新涼や笥が弾く水の音  
鳴くだけのいのち一途や秋の蟬  
蹴り終へて冠正す梶の鞠

落葉蹴る 竹貫 示虹

小春日や昭和一桁又も逝き  
朴落葉訃報はいつも唐突に  
小春日の猫にも言ふひとりもの  
漬け頃の猫にの言ふひとりもの  
くやしくてサツカー少年落葉蹴る

松田 都青  
あとのなき心必死に夕焼ける  
ご破算にならぬこの世の土用干し  
石に坐し翔べぬ女と見る花火  
好きなだけどう転んでも夏座敷  
炎天に完全停止の風と居る

遠 雷 丹生をだまき

遠雷や死なればケリのつかぬこと  
さがし物つひに見つけて天高し  
羅の羽織きまつて姐御風  
秋へ移る光うつろに淡は淡はと  
窓叩く野分めく風小止みなく

百日紅 柴田 朱美

逢ふたびに聞き役となり百日紅  
病むことは生き居る証百日紅  
追伸に本音ひと言百日紅  
若者は破調に生きて百日紅  
降り足らぬ空がのこりて百日紅



# 神麓集



青大将 丸井巴水  
煩惱の数ほど百足虫脚揃ふ  
すぐ閉ぢるポストの臉処暑近し  
もしかして青大将の抜ける音  
朝蟬の聲が覗きし目玉焼  
曲がる釘なほし二倍の汗を拭く

桔梗 塩貝朱千  
湖澄みて空は水いろ一途なり  
人想ふ桔梗揺らして来た風に  
山百合や晴雨を分かたつ峠越ゆ  
一人来し花野の犬に甘えらる  
大玻璃戸に一匹の蠅外は雨





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

団扇風しみじみと見る坐りだこ

京都 木戸 渥子

命終といふ未知数や銀河の尾

足音の静かに混みて蛍の夜  
ほうたるの夜の風を入れ袖袂

七月十四日クロワツサンを焼く

夏休み車椅子押すボランテイア

アリソナ 伊吹 之博

説法は横道へそれ落し文

夏期五輪表彰台に笑顔咲く

柚子の花八方美人の落し穴

高槻 田渕 昌子

夏五輪異国で祖国応援す

逃げ水や遅れさうなる待ち時間

夜通しで語る日のこと遠花火

さりげなく外す耳輪や思ひ草

とがめるは他人にあらす法師蟬

ロサンゼルス 丸田 信宏

祭り面かむりてよりの孤独かな

好きなことまた一つ増え夜半の夏

一色は空より借りて虹立ちぬ

豊中 村上 千紫

余白といふゆとり残して夏の夕

虹消ゆや指切あまたうやむやに

絵葉書に書ききれぬこと夏の果

遠き日の貝殻を手に青夜ゆく

オハイオ 水谷 直子

水不足俄な喜雨に濡れてみる

かさかさど手紙書く音夜の秋

鹿の子や蕾大好き夜こつそり

一族の霊鎮りし蓮の寺

蓮池の辺りにふるびし寺縁起

蜜豆や鼠肩の店のありし頃

あの峯をいま夕立の越え来たる

騒音さけ自分見つめ蓮の花

遊園地日盛り気にせず子の歓声

日盛は外出控へ「オリンピック」

坪庭は鷗外を知る風涼し

千年の移動舞台や祇園山車

青竹に水打ち清め鉦回し

掛声で車きしみて鉦動く

京離れ老いても聞ゆ鉦囃子

使ひ切る齡の時間優曇華咲く

清水呑み鉢の重さ肩にのる

土用三郎食べ頃を見定める

国境越えなば猛暑の兵馬桶

冷奴初めはたつたふたりから

かたつむり人間魚雷のどてつ腹

小突いたらどつと蛇やら烟やら

火蛾にでもなるか闇にまぎれるか

寂けさの中に金魚と深くゐる

一音のごと鳥すぎて百日紅

少年とひまはり畑を通過中

つぎつぎと朝顔開く濁りかな

帰省子の一人勝ちする腕相撲

はらはらず西瓜切る娘の左利き

エスカレーター匂ひの誘ふ鰻の日

蝉鳴くや子還り姉托しきて

逃げ水に鴉の影の溺れをり

左から見る君の顔水中花

さるすべり赫々風になる日まで

八月の空でらてらと飛蚊症

空家なるもじやもじや大樹蝉しぐれ

吾一人ひかりと来たり蝉生る

故郷の韻とぶらふや天の川

児童帽の糸みはじけるや鳳仙花

花嫁の父の声消ゆ胡蝶蘭

山霧に包まれ少女に戻りたる

霧晴れて父母ある頃の海光る

熊の道迷へば蜚案内す

佐々木紗知

布川 孝子

高野 春子

神田 惣介

浦安 安田 一郎

千葉 伊藤 希眸

松戸 岡山 敦子

直江 裕子